

中国をヴィヴィッドに感じるために —授業内における「映像」の活用—



好並 晶

1. はじめに

2008年は中華人民共和国にとり、世界オリンピック大会の主催及び成功裏に終えた記念的な年であると同時に、食品製造管理問題から少数民族問題、言論統制や杜撰な法整備などが世界規模で顕在化した動揺の一年でもあった。隣国である日本は、2005年ワールドカップ以降中国から繰り返し表明された強烈な反日感情の反動もあり、1月の中国製冷凍餃子薬物混入事件～3月のチベット暴動に対する解放軍と警察の武力鎮圧とそれに伴う報道規制～4月以降頻発した聖火リレー妨害と、漢族とチベット擁護派との紛糾～5月に起きた四川大地震に対する当局の遅々とした対応～6月の華南地方の大水害～7月、オリンピック開催会場附近の住民に対する不当な退去命令～8月、大会開会直後に起きた外国人観光客殺傷事件～五輪終了後の10月、大手会社乳製品の薬物混入事件、と中国の負の側面を多く報道し、中国に対する批判的見解を打ち出した。その影響下にあって、中国語を選択履修する大学生たちが中国に持つイメージもまた大きく悪化した。08年度前期開始の頃に、本学の一学部で行なった授業内アンケート「中国に対し如何なるイメージを抱くか？」に対する学生の回答には、「チベット問題を解決せずにオリンピックを開催すると必ず暴動が起こるだろう」、「スポーツの祭典であるオリンピックに、なぜ政治問題や民族問題がゴチャゴチャと入ってくるのか?」、「国内問題を解決するまでは五輪開催は時期尚早だ」、「TVメディアで事実を隠蔽しても、インターネットなどの情報網でバレるので無意味だ」、「身勝手な国で好きになれない」、「民族問題を数十年も放置していた中国は汚く卑劣だ」など、辛辣な意見が多く見られた。

「聖火リレー妨害行動があったなんて先生から聞いてはじめて知った」という回答もあったが、それがごく少数であることにむしろ驚かされた。大多数の学生が、中国への印象を貶めるに十分な情報量とそれに伴う「映像」に常に触れていた、逆から言えば、日本の報道、とりわけTVメディアが批判的観点を内包させて放映する「映像」が、常に彼らの眼前に反復されることにより、彼らはそれを物差しとして中国を見ることになった。

しかしそれは偏向した見方と言わざるをえない。中国という国を全面的に擁護するつも

りは筆者にもないが、彼ら学生諸君に中国の「ことば」を教える立場である以上、少しでもニュートラルにあの国を捉える機会を授業内に作れないだろうか、偏向を生むものが「映像」であるならば、その「映像」でその偏向を修正できないものだろうか、と真摯に考えた。以下、2008年度後期の中国語担当授業において語学教育の間隙を縫うように実践した、「映像」を使用する中国紹介の試みを三点ほど記録したいと思う。

2. 北京の街を走る——五輪フルマラソン映像を用いて

中国語基礎教科書には、概ね巻頭に中華人民共和国地図が用意されているが、時に北京市街地図が載せられているものもある。留学経験などで北京を知る者は身近さを感じもするが、語学授業実践中でこの市街図をフル活用する機会が必ずしもあるとはいえない。既出の紹介映像教材は北京市の著しい変貌振りに置いてゆかれる有様であり、また、道を尋ねる会話練習に使用するには都市の規模が大きすぎる。しかし、2008年に北京でオリンピックが開催されるにあたり、実際に放送された「映像」と市街図とをリンクさせ、その雰囲気を出来る限り生き活きと伝達することはできないか、と考えた。

先ず用意したのは、北京オリンピックの最終競技、男子フルマラソンのコースを線で描き込んだ北京市街地図と、そのコースが巡る名所の写真を刷り込んだプリントである。名所の写真にはその名称を書く括弧欄を付けておく。写真を見て場所の名前、建造物の名前が分かる学生に回答させると、マラソンスタート地点に位置する「天安門」は辛うじて正解が出るが、それ以外は答えられない。各名勝の呼び名とその中国語音、およびその場所がなぜ名所とされるかを簡単に紹介した後、アンケートを出した。「質問：環状構造の北京では単純な円でコースを作ることができるのに、五輪マラソンコースはなぜ複雑に入り組んだ形にしたのか？」返ってきた70回答中、「科学技術の発展など、中国の凄い所を全世界に伝えようとした」など、世界に向けた中国の宣伝、アピール目的であったとするものが47回答と圧倒的多数を占めた。他には、「暴動が起こりそうな箇所を外した」などの治安を理由とするものが6回答、「良い面だけを見せて、貧しい場所や醜い場所を外国メディアに見せないようにする」など負の側面の隠蔽とするものが5回答、整備的理由とするもの、選手に走り易いコース取りをしたとするものが共に2回答。中には、「中国選手に有利な条件を作り、他国ランナーをブツブツため」という中国国内選手の便宜と見るものが3回答あった。

その翌週の時限にこのアンケートの回答結果をプリントで公表した（回答意見については無記名にした）。その後、男子フルマラソンの中継映像（計約二時間半）を凡そ6分に

まとめたDVD映像を、名所の復習を口頭で行いながら学生に向けて映写した。早朝七時スタートにもかかわらず陽光を否応なしに照り返す長安街のコンクリート打ち込み路面、一時間も経たないうちに29℃まで上がる過酷な気温。とりわけ、北京大学から入り清華大学へと抜けてゆくコースは、アスファルト、コンクリート、石畳に煉瓦作りの花壇、と路面の硬度が目まぐるしく変わり、ランナーからの視点で構想された競技環境でないことが歴然としている。ここには最高学府である北京・清華二大学の存在を全世界にアピールする意図が見えよう。一方で、コース柵から遠く隔離された街頭の応援者たち、上空からの俯瞰映像に映り込んでしまう、予定では五輪までに完成していたはずの建築中高層ビル群など、決して北京＝中国を良く見せるものばかりとは言えない。生中継映像は、確かに北京のリアルタイムの姿を世界に向けて発信していた。

意外なのは、中国きっての最高学府の中をランナーに走らせるというかなり強引なライン取りが、上位に位置していた有力選手を各一名ずつレースから脱落させ、また先頭集団が駆け引きを展開する高潮点を作ったことである。結果的にとはいえ、全世界にハイレベルな教育基盤を形作っていることをアピールすることが目的であるコースが、男子フルマラソンの大きな見所となったのである。因みに、学生数名が挙げた「自国ランナーに有利に」という見解は、中国選手が全く上位に食い込めないという結果で否定された。中国側から見れば、世界マラソン選手のレベルに対する認識が充分でない、という省察点ともなったであろう。

この映像を観た後、再度学生にアンケートをとると、「日本で報道されるほど街並は汚くなかった」「天壇公園がすごく大きい」「北京大学構内に森や湖があった」「大陸性気候の過酷さが路面の反射で分かった」など、少なからず北京という都市のイメージが鑑賞前より現実味をもって感じられたことを示す意見が寄せられた。また、授業後にある学生から「観客が叫んでいた“jiā yóu”とは何と言っているのか」などという質問を受けるなど、生で聞こえる中国語に対する関心が開きつつあることを実感した次第である。

3. 日中関係史を「音楽・映像」で学ぶ——李香蘭と『蘇州夜曲』

前節で触れたように、日本のメディアによる中国への批判的な報道は、中国人民が強烈な反日感情を露わにしたことへの「返歌」であるという一面もある。だが、なぜ彼らがあれほどの反日感情を持つに到っているのか、そこに思考を巡らす地点へと、我々日本人は立ち返らねばなるまい。そうした場合、避けて通れないのが「日中戦争」という史実であろう。

2008年度に採用したある中国語教科書には、基礎読解練習用に「盧溝橋」と題する短文が用意されていた。その内容は、「八百年の歴史を持ち、260 mの橋壁にそれぞれ形態の異なる石獅子が並ぶ」との叙述があるのみであり、日中戦争の火蓋を切った場所である史実に言及していない。おそらくは意図的に避けているのであろう。だがその教材が、例えば「紫金城」や「頤和園」、「圓明園」ではなく、敢えて「盧溝橋」を挙げている点には、授業担当者にその史的事象を語る契機を与える意味も隠されているのではないか。

この文章を復習している際、ある学部の学生たちに「日中戦争」は何故起きたのか、との問いを發した。するとある学生から「“盧溝橋事件”があったから」との回答があった。その史的名称を記憶していることは賞賛すべきだが、その「盧溝橋事件」が如何なる「事件」なのか、ともう一步踏み込んだ問い掛けに対しては、学生達は返答に窮していた。このように、高等学校教育までの社会科の知識では、歴史上の単語名称を知ることはできても、その内在や具体的な様相に触れる機会は殆どないのである。

中国語を通じて、学生には中国という国を知る契機を持って欲しい、そのためには嘗て日本と中国が宗主国／従属国の関係であったという知識に触れる作業が必要であるとみなす筆者は、近年様々な実力派歌手によってカバー、歌唱されるオールド歌謡『蘇州夜曲』を手掛かりに、中国に対する日本の文化的侵略について講義する機会を授業内に設けた。以下にその概要を記したい。

先ず、小田和正による『蘇州夜曲』を聴く。服部良一の手による柔和なメロディに、西条八十の歌詞が乗る。

一、君が御胸に 抱かれて聴くは 夢の船歌 鳥の歌

水の蘇州の 花散る春を 惜しむか 柳がすすり泣く

二、花を浮かべて 流れる水の 明日の行方は 知らねども

水に映した 二人の姿 消えてくれるな いつまでも

三、髪に飾るか 接吻（くちづけ）しよか 君が手折り（たおり）し 桃の花

涙ぐむよな 朧（おぼろ）の月に 鐘が鳴ります 寒山寺

学生の話によれば、カバー曲の存在により現在の大学生でも耳にするメロディだという。朗々と流れる恋の歌に、学生は好印象を抱いた様子である。この歌の原曲は誰が歌ったのかと問い掛けると、概ね返答は無い。そこで、テレビ東京製作のドラマ『李香蘭』前篇（2007年）のオープニング場面を提示する。上戸彩演じる李香蘭がリサイタルで『蘇州夜曲』を歌い、観衆の熱烈なる拍手に包まれる。それに継いで映し出される場面は、日中戦争（第二次世界大戦）終結後の李香蘭に対する「貴様は中国人ではないのか?」「“漢

奸”だろう！」との尋問の様子である。上戸の李香蘭が中国語で抗弁する。「私は日本人なのです!!」……

学生には何のことなのか分からない。彼女が中国人なのか日本人なのかが何故問われているのか、まして「漢奸」とは何なのか、そもそも、誰もが知る上戸彩扮する「李香蘭」とは何者なのか。これが学生の興味関心を惹く大きな鉤となろう。

ここで李香蘭の経歴を、レジュメ資料を用いながら簡単に解説する。

1920年2月12日、中華民国奉天省撫順市に生まれる。南満洲鉄道（株）の中国語教師、山口文雄の娘、本名山口淑子。奉天市（現：遼寧省瀋陽市）で育ち、幼い頃から中国語に親しむ。父、文雄と東北地方軍政局官僚、李際春との間に義兄弟関係が結ばれたことから、淑子は李際春氏の義理の娘となり、「李香蘭」の中国名を受ける。日本語と中国語が堪能で、声楽を習っていたことから「奉天放送局」（日本教育宣伝文化活動機関）で歌手としてデビュー。日中両国の歌を歌い人気を博す。

その人気に乘じ、1938年「満洲映画協会（満映）」が彼女を中国人女優として映画デビューさせる。日本人の男性と中国人の女性の恋愛を通じ、日満親善、五族協和の宣伝媒体に。映画はヒットしないものの、彼女の歌う主題歌は広く人気を獲得。

日本では、その出生の秘密ゆえ「東洋の歌姫」と称され大人気を博す。1940年代には東宝（株）製作、満映製作協力の日本映画『白蘭の歌』『支那の夜』『熱砂の誓ひ』に連続主演（長谷川一夫と共演）。1941年2月11日には日本に“来国”、日本劇場で「歌ふ李香蘭」リサイタルを開く。その熱狂的な人気に、民衆と警察隊の衝突が起こる（日劇七周り半事件）。

“帰国”後、李香蘭は満洲から上海へと活動基盤を換え、上海で撮られていた映画『萬世流芳』に飴売りの娘として出演、その美声で上海でも人気を博す。後に満映を退社、終戦間際の1945年、上海大光明大戲院（Grand Theatre）にて「夜来香ラプソディ」公演、上海人を魅了。

終戦後、1946年に日本に帰国、山口淑子として銀幕に復帰。池部良、三船敏郎らと共演。後、アメリカでは「シャーリー山口」、香港では「李香蘭」として銀幕に復活、日本外交官大鷹弘と結婚。フジテレビ系「3時のあなた」司会などを経て自民党参議院議員となる。1992年に政界引退。

このように経歴を列挙すると、李香蘭の名をもつ山口淑子という日本人は、戦前～戦後にかけても順風満帆な人生を送っているように感じられる。しかし、満映の看板女優である彼女は日本と中国との相克に苦しんでいた。とりわけ、東宝製作の『支那の夜』は、彼

女を苦しめる日中文化相違を図らずも具象する作品となった。筆者はここまで説明した時点で、日中戦争終戦後に李香蘭が「漢奸」＝祖国反逆者の罪名をつけられる理由の一つともなった『支那の夜』の、主人公マドロス長谷が中国人女性の桂蘭を平手打つ場面を中心とするダイジェストを流し、学生に鑑賞させた。

山口淑子は当時を次のように回想している。

（『支那の夜』は）当時の世相や時局を反映した象徴的作品である。とくに私にとっては、漢奸容疑の罪状ともなった映画だけに、無知な時代の自分を見る恥ずかしい思いのする作品だが、いろいろな意味で思い出が深い。（略、本作中長谷川一夫演じる主人公に殴られるシーンで、力一杯殴られて）その平手打ちの痛かったこと！眼から火花が飛び散るというのは本当だ、と思い知った。

（略）戦後の日本では、男が女を殴ることも一種の愛情表現で、殴られた女が男の強さや思いやりに感激し、改めて愛に目覚めるという場面はよく見うけられた。しかし、それは日本人だけに通じる表現だった。『支那の夜』で日本人男性に殴られたのは、李香蘭扮する中国娘で、それを見て問題にしたのは、中国人だった。殴られたのに相手に惚れ込んでいくのは、中国人にとっては二重の屈辱と映った。そしてその行動様式を、侵略者対被侵略者の日中関係におきかえて見た一般の中国人観客は、（略）日本人に対する日頃の憎悪と反撥が更に刺激された。映画の教育宣伝目的は全くの逆効果で、抗日意識をいっそうあおる結果となったのである。

（『李香蘭 私の半生』より）

この時点で、李香蘭演じる桂蘭が長谷と共に蘇州を訪れ、『蘇州夜曲』を歌う場面を映し出す。すると、本歌詞の「君」が日本人であり、中国人女性の心情が日本人男性に占有される図式が明確に浮かび上がってくる。これが当時の国策映画の思想教育作法であったが、中国人の思考様式を知らない日本人が撮る国策映画は、中国人の感情を逆撫でしたのである。当時上海軍報道部映画検察官、辻久一は著書『中華電影史話』で次のように語る。

中国人の男女は、日本人の立場に都合よく合わせて仕立てられた。極端にいうと人形のようなであった。中国人を侮辱する気持はまるでなくても、中国人の生きた姿、端的にいうとその「心」を描けないために、中国人に不快な印象、嫌悪感を与える結果となったのである。

その嫌悪感が如何に大きいものであったかは、1989年フジテレビ開局30周年記念ドラマ『さよなら李香蘭』のラスト場面に見ることができる。李香蘭に対する漢奸容疑裁判が

無罪で結審、上海黄浦江の港から日本に帰国する際、裁判長が李香蘭——既に山口淑子に戻った彼女に「あなたが『支那の夜』などの国策映画に出演したことは非常に残念だ」と告げる事実（これは山口淑子自伝にも記されている）は、李香蘭の「利敵行為」に対する大きな遺憾と非難の意思が強く現れ出ている。

では、現代の若者にとっての『蘇州夜曲』はどういうものか。あるインターネットブログには、若い日本人女性が以下のような経験をしたことが描かれている。

先日、とある小さなパーティーの後、ウチの近所に住んでいるという女の子に誘われて、カラオケに行きました。メンバーは（略）、中国人（若い男）と、カナダ人（若い妻帯者）、アメリカ人（37歳バツイチ）とバイリンガルだという日本人女性（35歳）、そして、私。

中国人の子に「『蘇州夜曲』を歌おうかな」と言ったら笑っていたので歌ったのですが、ワンコーラスが終わるか終わらないかの時、中国人の子にカラオケを切られてしまったのでした。「操作のミスだ」と言っていたけれど、いきなり切られて吃驚したし、ちょっとした不快感を抱いてしまったのでした。（略）家に帰って調べてみたら、なんと、中国では『蘇州夜曲』はタブーなんですって。日中戦争時代の歌だから、というのが理由だそうです。（略）私は反省しました。無知であること、それ自体が、誰かを不愉快にさせるのだ、と。

歌う前に教えてくれたらよかったのに、とも思います。嫌がらせの気持ちなど毛頭ないどころか、わかっていたら歌わなかったのだから。今はただ、自分の無知が恥ずかしい。

そして、さりげなくカラオケを中止させた中国人の子の賢さに、ちょっと脱帽。いや、いろいろな意味で、さみしい話ではあります。

（「『蘇州夜曲』はタブー」2006.04.24 記、ブログ『「厭離穢土」は「飛翔」に非ず』より、<http://suwwakai.exblog.jp/1902025>）

若い中国人は『蘇州夜曲』という歌謡が如何なる意味を持つものかを理解している。それは中国における自国史教育が、亡国の危機に瀕したという屈辱の足跡を、人民革命史とセットで踏まえているからである。それに対し、日本の歴史教育は今だに中国への戦争行為を「侵略」と記すか「進出」と記すかのレベルで紛糾しているだけでなく、その課程進捗上、日本史教育は我々が最も熟知せねばならない“ごく近くの歴史”——即ち第二次世界大戦以後の現代史に殆ど触れないまま終わる場合が多い。この知識の不足ゆえ、辻久一が述べるように侮辱する気持はまるでなくても、中国人に不快な印象、嫌悪感を与える可

能性が、日本に住む中国の人々が益々増える現在において充分にあり得るのである。そのことを我々は認識せねばならない。

このように講義すると、『蘇州夜曲』に好感を抱いた学生を落胆させる可能性もある。その折角の感受性を損ねないためにも、この楽曲がやはり普遍的な美しさを内包するがゆえに小田和正（「服部良一生誕百周年記念トリビュートアルバム」）をはじめ、平原綾香（アルバム「Odyssey」）、夏川りみ（アルバム「歌さがし」）や Ann Sally（アルバム「Moon Dance」）など多くの実力歌手に歌い継がれている事実を示した。また逆説的ではあるが、（株）サントリーがテレビCMに使用した中国語歌詞の日本歌謡曲を集めたCD『Chai』には、中国語版の『蘇州夜曲』まで存在する。講義内ではその音源を使用しなかったが、流麗な中国語音声の響きを学生に伝えるため、以下の同曲歌詞を朗読した。

依偎在你的怀里 听着那鸟语般的歌 轻似风柔似水 爱的船歌

花落水春已去 迷人的水乡苏州啊 杨柳也在为你哭泣 为你叹息

本講義の最後には、この内容に興味を抱いた学生のために以下の書籍と映像作品を紹介した。

- ① 山口淑子・藤原作弥著『李香蘭 私の半生』（新潮文庫 1989年12月20日初刊）
- ② 山口淑子著『「李香蘭」を生きて（私の履歴書）』（日本経済新聞社 2004年12月）
- ③ 四方田犬彦編集『李香蘭と東アジア』（東京大学出版会 2001年12月）
- ④ フジテレビ開局30周年記念ドラマ『さよなら李香蘭』（上・下篇）（主演：沢口靖子、1989年12月放映、ビデオ発売、現在廃盤）
- ⑤ テレビ東京特別ドラマ『李香蘭』（満州篇／上海篇）（主演：上戸 彩、2007年2月11～12日放映、DVD発売）

4. 改めて《山水情》を鑑賞する、並びに開かれた意見交換の場をつくる

筆者は以前より、上海で作られた水墨画アニメーション作品《山水情》を中国語授業の中で学生に鑑賞させ、その作品に対する質問に答えさせる機会を作っている。嘗てその質問に対する回答をまとめ考察した文章を書いたことがあるが、以降7年来、学生の反応について報告した機会がないので、この場を借りて今年度の学生に見られた特徴を記しておきたい。

水墨画アニメーションとは、1960年に上海美術電影制片廠により試行を繰り返し確立された手法である。アニメーション映像は、現在こそコンピューター映像による編成が可能となったが、嘗ては既に絵画済みの透明セルロイドを背景画に重ね合わせ、連続撮影して

動作を組み立てていた。水墨画アニメーションも恐らくは基本的に同じ方法を踏襲していると考えられるが、水墨画独自の滲みやボケを作り出しながら動作を付けるという、中国独自の技巧を備えたものである。18分という短編であるため授業進行の支障にならず、中国伝統楽器である古琴による音楽と水や風の音響効果のみで台詞が無く、中国語基礎を学ぶ学生にも適している。また物語要素が希薄なため、鑑賞者のイメージによって鑑賞様式が変化し、多種の意見を得ることが出来る。

この《山水情》の物語を簡単に説明すれば次の通りになる。

古琴を抱いて旅を続ける、隠遁者のような姿をした老人男性が、小笛の演奏が得意な子供が船頭をする舟に乗り川を渡る。岸に着くや、老人は眩暈を起こして倒れてしまう。船頭の子供は彼を自分が住む小屋に連れ帰り看病をした。気が付いた老人は、琴に興味を抱くその子供に奏法を教える。老人が小屋で療養している間に、その子供の琴を弾く腕はみるみる上達していった。ある日、親鳥と小鳥の空飛ぶ様子を見た老人は、子供と共に舟に乗り深き山中へと向かう。彼は自らの生命が果てることを子供に告げ、古琴を託す。子供は老人の前に跪いて恭しく琴を受け取り、老人が山の中へと消えていく間、琴を引き続ける。堂々たる演奏が終えた時、その子供は既に成長し、遠く、老人の去って行った彼方を見やる。

この作品に関して筆者が着目するのは、老人に付き添って暮らす子供が意図的か否かにかかわらず、極めて中性的に描かれているという点である。因みに2002年、本作が日本で紹介された際には邦題が『琴と少年』とされており、筆者はそれに対し疑義を提起したことがある。それにまつわり、鑑賞したあと学生に質問するのは次の三項目である。

- 1) 登場人物の子供の性別を、理由もつけて答えよ。
- 2) 本作に託されたメッセージとは何か。
- 3) 本作《山水情》に相応しい邦題をつけよ。

この第一項目の回答により、学生が各々いかに本作を捉えたかが明確となり、それは第二、第三項目の回答に影響する、という仕組みである。例年同じアンケートを学生に回答させると、第一項目は三分の二が「女の子」と回答する。今年についても、4クラス総113名中の76名がそのように答えた。

どのように男女の性別を決定したかについては、2008年度の学生の回答も例年のものと傾向が似ている。少数をなす「男の子」と回答した代表的なものとしては、「船頭を生業としている」「倒れた老人を小屋に独りで連れて帰った」「走る姿がガニマタに見えた」「琴を奏でる力強さが男性らしい」など、本作中の子供の行動や身体的力量に着目してい

るものが多い。それに対して大勢をなす「女の子」と回答したものは、「髪や睫毛が長い」「顔がふっくらとしていて女の子らしい」「楽器の触れ方が女性らしい」「寒そうに手をこする仕草が可愛い」など、顔の形象特徴や指先に着眼したことが明確に表れる。

今年度の学生たちが極めて真剣にこの作品を鑑賞した結果が以下の数点で判明する。子供の性別を決定する際、「舟を漕ぐ」という行動に対して対照的な回答があった。「男の子」と答えた学生は「川の渡しという力作業」を理由とするが、同じ行為に対し「舟を漕ぐ姿も、力強く漕ぐというより、流れを受け流すような印象があり、女性的だ」と見た学生が存在した。筆者は今まで、多数の学生と幾度となくこの作品を鑑賞したが、舟を漕ぐ行為に対しこれほど具体的に捉えたことはなかったために、驚きをもってその意見を読んだ。また、これは3～4年に一度の割合で起こる現象であるが、男女の別に対し「どちらとも言えない」と答えた者が一名存在した。理由は、「この物語では、男女の区別を決めてはならないと思う」。本作に登場する人物は自然万物の擬態化である、男女を決定しては師弟の関係性に微妙な狂いが出る、などとした過去の学生の回答に較べ多少言葉足らずな感があるが、自ら想像を膨らませようとする痕跡が見られ興味深い。また、第一項目に「女の子」と回答し、「同じ興味関心は年齢を超えた、身分不相応の恋心を引き寄せる」というテーマの捉え方をする学生が二名（男子、女子各一名）いたが、この現象は2002年度以来で最も多い結果である。

このように本作に興味を抱き記されたアンケートの中に、やや気に懸かる回答があった。「男の子」と答えた一学生の理由に、「こんなに可愛い子が女の子である筈がない」（男子学生）。「女の子」と答えた別の学生の理由に、「あんなかわいい子が、男の子のわけじゃないじゃないですか」（男子学生）。これは各々別クラスの学生が書いたもので、互いに示し合わせたわけではない。しかし正反対の回答をしながら、字句まで酷似した記述であることに、筆者は驚きを感じた。とりもなおさず、この回答は登場人物の子供の性別を判断する「理由」になっていない。この記述には他者との議論を拒絶するような、独特の閉鎖性がこめられているように感じられた。

第二節の北京フルマラソンの時と同様に、学生から受け取ったアンケートは典型的な意見を選択してレジュメ化し、回答者名を公表せず次時限に学生に配布した。ある対象に触れることで思考を促し、それを文章化することを練習すると同時に、クラスメートという他者は同じ対象を如何なる角度から捉えているかを、回答結果で理解させるのである。筆者もその結果を口頭で読む際に、一言二言コメントを附ける。学生たちは小テストの解答などよりも遥かに興味深く、彼ら自身の回等群に注目し、また筆者のコメントにもヴィ

ヴィッドに反応する。このような、講義者～受講者間の交流のみならず、受講者～受講者という他者の交流という多方向に開かれた意見交換の場が、目下の大学生には不可欠ではないかと、瓜二つの表現でありながら正反対の方向を採る回答が、筆者に確信させたのである。

5. おわりにかえて

《山水情》のアンケート結果公表が終わった授業後、ある学生が質問に来た。「さっきの答えを知りたいんですが」。筆者は筆者なりに登場人物の子供の性別がどちらであるかの答えを持っている、と話したので、それを訊きに来たのだ。その「解答」を解説すると「逆だと思ったのですが、納得しました」と満足げに帰っていった。その学生の真剣な眼差しが非常に印象深く感じられた。

2008年12月半ばに、筆者が年度初めに提起した内容を再度アンケートとして提起した。但し、それは嘗ての単問ではなく、次のような複数の問い掛けを付随させてのものであった。

- 1) 中国に対する今現在のイメージは？【很喜歡（とても好き）／喜歡（好き）／不太喜歡（あまり好きではない）／不喜歡（好きではない）】
- 2) 現在の日本に対するイメージは？【很喜歡／喜歡／不太喜歡／不喜歡】
- 3) 上記をふまえ、自分自身は大学生活で何をしたいか？

1) と 2) は、中国語で選択する形式を採り、その理由を日本語で自由に書いて貰った。中国に対するイメージは、很喜歡が2票、喜歡が13票、不太喜歡が38票、不喜歡が6票。授業を受けてイメージはだいぶ変わったけれどやはり未解決問題があるから、などの答えに、中国に附与された負の側面の根深さを見る思いがする。そして日本に対するイメージも、很喜歡が2票、喜歡が18票、不太喜歡が28票、不喜歡が7票、“？”が1票。「日本人が自国に対し無関心。この先やっていけるのか不安でならない」「現政権は何をしたいんだ？」と手厳しい。

3) に対しては「社会的常識を身につけたい」「社会勉強も含めバイトをしてみたい」「人との関わり方を学びたい」など社会性へのアプローチを試みる意見や、「固定観念を捨てて自分自身を磨きたい」「中国だけでなく日本のことも学びたい」「様々なものの見方ができるようになりたい」など、視野を広げたいと考える意見、「世界的不況の中で手に職をつけたい」「目指す職に就きたいのでその仕事に益する勉強をしたい」「Made in China ばかりの日本に Made in Japan のものを増やしたい」、と実益や専門家への道を目指す心

強い意見が見られた。また、アイデンティティの確立を望む意見のなかにこのようなものがあった。「自分は真実を知りたい。今のままでは疑いばかりで何も信じられない。日中両国の真実を知り、どういう状況なのかを知りたい。自分にとり何が正しいのかを見極めたい」。このアンケートは無記名で行なったので分からないのだが、その真面目さは《山水情》に登場する子供の性別の「解答」を尋ねてきた学生の、真剣な眼差しと被って見える。果たして「真実」とは何かとなると筆者にも回答が浮かばないが、この真摯さが学生諸君に新しい想像と創造をもたらさんことを切に望む。

以上、語学教育とはややかけ離れた授業実践の記録となったが、このように若き学生たちの意見を聞き、また筆者の意見も交わしながら開示してゆく行為は、学ぶ者たちの開かれたモチベーションを高める契機となるのではないか、そのフックとしての「映像」は、彼らの目を見開かせる強力な「教材」たりうる、と筆者は考えたい。附記すれば、上記のアンケート三問の欄外には、このような記述が見受けられた。「先生が時折見せてくれる資料はとてもおもしろい」「こういうアンケートは実に面白いから、是非やってほしい」「この授業で最後にやる“中国”の話はすごくためになる」「中国の豆知識を知りたい（～したら喧嘩になるとか）」。既にモチベーションの萌芽が、ここに見えはしないだろうか。